



Title	Interface humanities 03
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12940
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文科学 / Interface Humanities
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヒトの場合、「女」あるいは「男」であるといふのは単なる生物学的自然でもなければ、自動的に「なる」ものでもない。私たちは生まれ落ちたとたん、それとは知らぬ間に、性器の外見を手がかりに「男」と「女」のカテゴリーに振り分けられた後、それぞれの社会の性別文化に応じた名前や服装、しつけや教育を与えられ、何が女として、あるいは男としてふさわしいか、ふさわしくないかを学習しながら成長していく。多くの社会で性別は、その社会の構成員を分割する最も基本的な差異として位置づけられているだけではなく、二つの性はことさらに対照化され、非常に異なるものとして構築される傾向が強い。

このような文化的・社会的制度として設定された三元的性差を指して「ジェンダー」と呼ぶ。ジェンダーは、生物学的解剖学的性差とされる「セックス」と対比して説明されることが多いが、じつはこの二つの境界はそれほどはつきりしているわけではない。たとえば、最近では「男脳・女脳」のように脳の解剖学的構造自体に性差があるとする研究が関心を呼んでいるが、人間の脳は生まれたときには未完成の状態で、その後のさまざまな身体的・認識的経験を通じた学習によって構造やプログラミングが形作られていくといわれる。したがってジェンダーにより遭遇する経験の内容や種類に大きな差がある環境では、脳のマテリアルな構造や働きにも性別という факторが組みこまれつつ発達していくことになる。すなわちセックス

の領域の成立にはすでにジェンダーが関与しているのである。

つまり私たちは、不動のメスまたはオスの体の上に文化としての性別を気分によつて着脱可能な衣装のようにまとうのではなく、肉体それ自体の中に社会的性別を深く刻印し、日々それを更新したり微調整しながら「女」あるいは「男」という役割を演じ続けているといえる。たとえフェミニズムや男性学の言説を通じてジェンダーは人為的、文化的に作られたものにすぎないと学んだとしても、多くの人がそれまでの男、あるいは女としてのハビトゥスを修正するのに困難を覚えるのは、このように性別文化が身体化されることによって自然化され、最も効果的な内側からの社会的コントロールの装置として機能しているためなのである。

それでは「男」あるいは「女」という自分に振り当たられた役割が気に入らなかつた場合、そこから降りることはできるのだろうか。マッヂョナンナハン・ライダードった薦森樹は、ある日突然、「男」という存在に対する全拒否の衝動から、優美な「女性」の姿へ、さらには「男でもなく女でもない」存在へと、ジェンダーをトランスする旅に出た。その過程で自分に起きた変化をつづった本は、「男」と「女」が、服装や立居るまいにはじまり、生き方や人への接し方、仕事、性行為のしかたに至るまで、どれほどすみずみまで強固に性別カテゴリーによる異文化の壁に隔てられている

性別という役割

荻野 美穂

トの場合、「女」あるいは「男」であるといふのは単なる生物学的自然でもなければ、自動的に「なる」ものでもない。私たちは生まれ落ちたとたん、それとは知らぬ間に、性器の外見を手がかりに「男」と「女」のカテゴリーに振り分けられた後、それぞれの社会の性別文化に応じた名前や服装、しつけや教育を与えられ、何が女として、あるいは男としてふさわしいか、ふさわしくないかを学習しながら成長していく。多くの社会で性別は、その社会の構成員を分割する最も基本的な差異として位置づけられているだけではなく、二つの性はことさらに対照化され、非常に異なるものとして構築される傾向が強い。

このような文化的・社会的制度として設定された三元的性差を指して「ジェンダー」と呼ぶ。ジェンダーは、生物学的解剖学的性差とされる「セックス」と対比して説明されることが多いが、じつはこの二つの境界はそれほどはつきりしているわけではない。たとえば、最近では「男脳・女脳」のように脳の解剖学的構造自体に性差があるとする研究が関心を呼んでいるが、人間の脳は生まれたときには未完成の状態で、その後のさまざまな身体的・認識的経験を通じた学習によって構造やプログラミングが形作られていくといわれる。したがってジェンダーにより遭遇する経験の内容や種類に大きな差がある環境では、脳のマテリアルな構造や働きにも性別という因子が組みこまれつつ発達していくことになる。すなわちセックス

かを、克明に描き出している。

とはいゝ鳶森は「女」にトランスするために永久脱毛はおこなつたが、ホルモン投与や性転換手術による性器の外見レベルでの身体改造はおこなわなかつた。というのも彼／女の場合は、その人間が「男」と「女」のどちらに属すかを決定する最終的根拠としての意味づけがどんどん希薄化されていったからである。鳶森による「体を張った」役割攪乱の試みには、通常ジェンダーの「原因」と考えられている三元的なセクシクスと異性愛的セクシユアリティとは、じつはジェンダーという文化装置が遡及的に作り出した「結果」、あるいは偽りの起源に他ならないのだという。ジュディス・バトラーの主張を彷彿とさせるものがある。

一方、性別役割転換に関しては、「性同一性障害」と呼ばれる人々の性転換（性別適合）手術も近年注目を集めている。これは自分の性アイデンティティと身体的性別との不一致に苦しむ人が、性器外科手術を中心とした身体改造をおこなうことで「心の性」の方に「体の性」を合わせようとするもので、日本でもこの種の医療が正真正治療として認められるようになった結果、ながらく当事者たちの悲願であつた、手術後に戸籍上の性別変更を認める法律も昨年成立した。健康保険証からパスポートまで、日常生活の中で何事につけても書類上の性別記載がつきまとう社会で、「性同一性障害」の人々がこれまでどれほど不自由や苦痛を経験してきたかを考えれば、このこと

자체はとりあえず前進と評価できるだろう。

だが、これを強固な性別二元制としてのジェンダーがゆらぎはじめたしと解釈することには、慎重でなければならない。性転換手術の前提にあるのは、あくまでも性器の存在こそが「男」あるいは「女」であることの根拠と考え、医療の力によつてこの「正しい身体」を回復させようとする発想である。また性転換を望む人は、手術前にも後にも、服装やふるまいにおいてステレオタイプな「女らしさ」や「男らしさ」を忠実に演じることで、社会的な性別規範に順応しようとする傾向が強い。つまりそこでは「性別の変換」という一見破天荒な現象が起きているようでいて、性の二元制そのものは解体されることなく反復され堅持されているという点では、むしろ保守的とすらいいうのである。授業での学生の反応を見ていると、性の二元制を混乱に陥れるような同性愛やトランスジェンダーの話よりも、性同一性障害の人々の話に共感する割合が高いように思えるのも、そこにはある種の既視感、安心感が見出せるからなのかもしれない。

荻野美穂（おぎの・みほ）

一九四五年生まれ。奈良女子大学大学院博士課程中退。人文科学博士。奈良女子大学、京都文教大学をへて、現在大阪大学大学院文芸学研究科助教授。著書に「生殖の政治理学」（山川出版社）、「中絶論争とアメリカ社会」（実波书店）、「シエンダ化される身体」（勁草書房）など

日

暦初旬、東京世田谷の成城大学において日本演劇学会の秋の研究集会が「比較演劇の新視点」というテーマで一日にわたって催されたが、二日目の午後には、「徹底討論」と銘打たれた四時間ちかくにおよぶ「能・淨瑠璃・歌舞伎のドラマ」と題するシンポジウムがあった。筆者はそのシンポジウムに能からペネリストとして、淨瑠璃の内山美樹子氏（早稲田大学）、歌舞伎の近藤瑞男氏（共立女子大学）のお二人とともにに参加した。司会はイプセン研究や比較演劇研究で知られる毛利三彌氏、だつたが、このシンポジウムは上演という要素を討論の対象からはずして、焦点をドラマ（戯曲）という一点に絞つたことが成功して、日本伝統演劇の本質の解明という点で、まことに意義あるものになつたのではないかと思う。

そのシンポジウムにおける筆者の報告と発言は、いま振り返つてみると、結局、能の詞章の半分ちかくを占める地謡の機能ということにかかわっていたようだ。

それは換言すれば、能の地謡部分の詞章を作り出せる意見あるいは感想とみる長きにわたる誤解にたいする異議であり、その誤解から導かれた、能を特殊な演劇とみる見方——あるいは能は演劇にあらずとする見方——にたいする批判であり、さらにいえばドラマ（戯曲）としての能の「役割」ということでもあった、と思う。現在の能の地謡と呼ばれる部分は、客席から見て舞台右側に突き出した地謡座に座った八人の地謡役の役者だけが謡い、シテやワキは地謡役が謡う詞章はまったく謡わない形になつてゐるから、その部分を小説の「地の文」のようだ、第三人物的な文章と理解してき

たのは、一面ではムリもないことではあった。そうした理解は、おそらく明治期には生まれていたようだ、たとえば坪内逍遙は、「地謡」を「地の文即ち著作者自身の觀察、詠嘆、批評」「地即局外者の言ふべき筈のこと」などと理解していたし、「文致及び脚色上より観たる謡曲文」「能樂」（明治三十九年一月）、野上豊一郎も、その著『能研究と發見』（昭和五年、岩波書店）の巻頭に收められた「能の主役一人主義」において、「能の合唱歌は抒情詩成分もないではないけれども、多くの場合それは叙事詩として取り扱はるべき性質のもの」としている（ここにいう「抒情詩」は純粹なセリフのことと、「叙事詩」はセリフとはみなせない第三人物的な文章を意味している）。

また、現代においても、たとえば木下順二氏に、能役者を他の演劇の役者と比較してのつぎのような発言がある。

演劇の俳優は常に自分の扮した役の人物である。自分が扮した人物だけで彼はあるわけで、その人物としての考え方や環境などをせりふとして語るだけである。それに対し能役者は、時に自分の扮した役の人物であるが、その次の瞬間にはその自分を他者として見る、他人として見るという面を持つ。その自分で他者として見る何者かであり得ること、それが演劇の俳優との大きな違いだと思います。つまり、能役者は、時に役としてのせりふを語る人であるけれども、次の瞬間には自分のことを語る語り手であつたり、自分を支配する運命であつたり、自

分を包む自然そのものであつたり、そのときそのときに見事に変身しながらもそのいざれにも没入して自己を見失うことがない。（『現代演劇と能―創作者の立場から』）

これは昭和五十四年に法政大学能楽研究所が催した国際シンポジウム「世界の中の能」における講演の記録であるが、それと明言されとはいひが、能役者を「自分を他者として見る」としているのは、まず確実に地謡を第三人称的な文章と理解した結果と思う。これは具体的には『忠度』などを念頭においての発言かと思われるが、現在の『忠度』はシテが忠度の立場になつたり、忠度を討つた岡部六弥太の立場になつたりするよう誤解されている、現代日本を代表する劇作家である木下順二氏も、能の地謡を第三人称的な文章と考へていたのである。ということは、現代では、ほとんど人がそう理解しているということであろう。

しかし、じつは地謡部分のほとんどはシテかワキのセリフであり（シテの場合が圧倒的に多い）、第三人称的な客観描写的な文章は一曲の終曲部などにごく一部あるだけなのである。そのことをみごとに解説したのが昭和六十一年に発表された表章氏の「能の同（音）と地（謡）」（『国語と国文学』同年四月号）であつたのだが、それは一般の能楽愛好者にはほとんど知られていない。つまり、ドラマ（戯曲）としての能の「役割」は、多くの人が漠然とイメージしているように、「自在」でも「曖昧」でも「交換可能」でもないであつて、その点では他の演劇とともに変わることはない、というこ

とである。

冒頭にふれた日本演劇学会のシンポジウムでは、筆者はもつぱらそのようなことを主張したのだが、しかしその一方、討論の過程で、「ああしばしとてひきともる」（『望月』）のように、能には地謡以外のところで、登場人物が自身の行動を自分で説明するようなセリフが少なくないことに参加者の関心が向けられ——このような現象はこれまで能の「語り物」的な性格に由来するものと考えられていた、終了まぎわになつて、そのような例は西洋の古い演劇にあるという意味深い発言があつた。こうして、「徹底討論」はまさに「比較演劇の新視点」にふさわしい内容になつたのだが、その結果、筆者はあらためて登場人物が自分の行動を自分で説明する現象が気になりはじめ、ドラマ（戯曲）としての能の「役割」について、またあらたな課題を背負うことになつてしまつたのである。



〈望月〉(近江守山の宿での仇討の能)

天野文雄（あまの・ぶみや）

一九四六年、東京生まれ。一九八〇年、国学院大学大学院文学研究科修了。上田安子短期大助教授を経て、一九八七年、大阪大学文学部助教授（芸能史・演劇学講座）に着任。現在、大阪大学大学院研究科教授（芸術学講座）。文学博士。専門は能楽史。著書に、「若波講座・能狂言・能楽の歴史」（一九八七年、表洋社）、「翁猿楽研究」（一九九五年、和泉書院）。同書より第一回觀世寿夫記念法政大学出版会がある。



『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』

金水敏
岩波書店 2003

◎〈博士語〉〈お嬢様ことば〉など、ステレオタイプな日本語の話体の原理と起源を、マンガや小説、映画等の例を使って解き明かす。



『異文化の語り方あるいは猫好きのための人類学入門』

中川敏
世界思想社 1992

◎人類学のもつ二面性、そのうちの理論に焦点をあてた猫（理論）好きのための人類学入門書。分析哲學的な人類学の紹介。

The Hero with a Thousand Faces
Joseph Campbell
FONTANA PRESS 1993 (1949)

◎世界の神話・伝説・昔話に共通する物語の基本構造を「ヒーローの旅」ととらえ、ヒーローに関わる登場人物たちの様々な役割 (archetype) を解き明かした。



『交換の民族誌あるいは犬好きのための人類学入門』

中川敏

世界思想社 1992

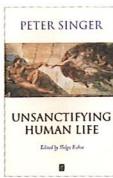
◎人類学のもつ二面性、そのうちの事実に焦点をあてた犬（事実）好きのための人類学入門書。エンゲの民族誌を使った人類学の紹介。



『ステレオタイプの社会心理学』

上瀬由美子
サイエンス社 2002

◎「ステレオタイプ」の形成と超克の原理について、社会心理学の立場から平易に解説した本。



Unsanctifying Human Life

Peter Singer / Edited by Helga Luhse
BLACKWELL PUBLISHERS 2002

◎人間という生物を特別視しない立場からバーソン論に新しい角度を持ち込んだ。

「役割」を読み解くための12冊

ブックガイド



『オトメの祈り—近代女性イメージの誕生』

川村邦光
紀伊国屋書店 1993

◎全国の女学生が女学生ことばで雑誌の投稿欄に繰り広げた「想像の共同体」に迫った本。



Sexing the Body

Anne Fausto-Sterling
BASIC BOOKS 2000

◎科学的言説が連続的で境界のあいまいな身体から、どのようにして二元的な性別を発見し確立していくかを、ユーモアをまじえて描き出す。

Gender Reversals & Gender Cultures
Edited by Sabrina Petra Ramet
ROUTLEDGE 1996

◎ジェンダーが時代と文化に応じてどのように多様な様態をとりうるかを、具体例を通して示している。



『ジェンダー・トラブル』

ジュディス・バトラー / Judith Butler 竹村和子(訳)
青土社 1999

◎「ジェンダーがセックスを捏造した」という挑戦的テーマによって、大きな衝撃を与えた本。

『男でもなく女でもなく』
葛森樹
勁草書房 1993

◎著者は、日本におけるカムアウトしたトランスジェンダーのバイオニアともいべき存在である。



『能の多人大合唱』

藤田隆則
ひつじ書房 2000

◎世阿弥の時代から現代にまでいたる能の合唱部である「地謡」の形態と機能の変遷を多くの資料を用いてあづけた書。著者は大阪大学大学院文学研究科修了で音楽学が専門。

i h .Topics

「インターフェイスの人文学」のさまざまな活動情報を紹介します。

Event Data

「インターフェイスの人文学」イベント紹介（2002～2003）

「インターフェイスの人文学」では採択以来今日まで、多くのイベント（シンポジウム、講演会、ワークショップ、セミナー等）を主催・共催してきました。その中から代表的なものをリストアップします。各イベントの詳細ならびにその他のイベントについては、ホームページ（<http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/>）をご参照ください。

△ 岐路に立つ人文学

日英の第一線の歴史学者が
一堂に会した学術会議
2003年9月9日～9月13日
第四回日英歴史家会議 The Fourth Anglo-Japanese Conference of Historians 2003
State and Empire in British History
於 京都市国際交流会館

ジャーナリスト、学習塾講師、元判事らを招いて実践した「インターフェイス」における対話の試み。
2002-2003 年度報告書『岐路に立つ人文科学』
第2部に報告あり
2003年9月22日～9月23日
ワークショップ「現場という領域、情報という領域」
於 千里阪急ホテル

△ シルクロードと世界史

最先端の研究成果を高校教員と共有する試み。
本誌30、31頁参照
2003年8月5日～8月7日
全国高等学校世界史教員研修会
於 大阪大学付属図書館内 図書館ホール

△ トランスナショナリティ研究

質の高いセミナーを着実に継続中
2002年12月20日～2004年2月20日
トランスナショナリティ研究セミナー 第1回～第23回
於 人間科学研究科・ユメンヌホール

連続セミナーの蓄積に基づくシンポジウム
2003年11月29日～11月30日
シンポジウム「トランスナショナリティ研究の地平」
於 人間科学研究科・ユメンヌホール

▷ イメージとしての〈日本〉

「日本文学の魅力」「翻訳の可能性」のテーマのもと、各国留学生、国内外研究者が日本文学と翻訳について縦横に語り合う。
報告書DVDに収録
2003年3月16日
「日本文学国際研究会」基調報告シンポジウム
於 グランキューブ

源氏物語・最新の英訳本を刊行
R.タイラー氏はほかを迎え、
源氏物語のグローバルなパワーを検証する
2003年12月6日
日本文学国際研究集会
「海外における源氏物語の世界 翻訳と研究」
於 大阪大学コンベンションセンター

△ 言語の接触と混交

ブラジルにおける日本語の実態を把握する
2003年3月11日
国際研究会「越境する日本語—ブラジル日系社会の言語をめぐって」
於 文学部中庭会議室

言語・文化の接觸面における対立・軋轢と共生をめぐる国際シンポジウム
2003年11月25日
「言語の接觸と混交：
多言語・多文化社会としての日本の現状と課題」
於 言語文化研究科・大会議室

△ 映像人文学

東アジアとトルコの文字に焦点を当てたフォーラム
2003年3月8日～3月9日
第3回国際デザイン史フォーラム「画像と文字」
於 大阪市立住まい情報センター・3F・ホール（8日）／大阪歴史博物館・3F・講堂（9日）

▷ ウィーン、ブダペスト、プラハをテーマとした連続講演会

2003年5月28日～5月30日
平成15年度 懐徳堂春季講座 第105回
「中欧三都市物語—都市の景観と文化—」
於 大阪府立文化情報センターさいかくホール

ベトナムを会場とした、日越の音楽、映像、美術をめぐる交流
2003年8月31日～9月1日
国際フォーラム「映像の力—日越両国文化の比較と交流のために」
於 越日人材協力センター（ハノイ貿易大学構内）多目的ホール

近代日本人はヨーロッパをどのように見ていたか
2003年11月5日～11月7日
平成15年度 懐徳堂春季講座 第106回
「歐羅巴—近代日本からの眼差しー」
於 大阪府立文化情報センターさいかくホール

△ 文化と建築をテーマとしたシンポジウム

2003年12月2日～12月3日
「映像人文学」メディア・デザイン・インターナショナル論パリ・シンポジウム
"Environmental Interface between Alphabetic and Non-alphabetic Cultures"
「アルファベット文化圏と非アルファベット文化圏の建築環境インターフェイス」
於 パリ・ラ・ヴィレット建築大学

△ 臨床と対話

臨床コミュニケーションのモデル開発と実践をめぐる提言
2003年2月23日
「第1回対話シンポジウム—対話を促進する方策と、場の構築のための連携ー」
於 大阪大学豊中キャンパス・共通教育本館（4号館イ講堂）

Research activities 2002*2003

「インターフェイスの人文学」2002・2003年度報告書のご紹介

本プログラムの中間報告として、全8巻の報告書が2003年12月～2004年1月に刊行されました。全巻のリストと目次をご紹介します。閲覧、残部、発送先等については、「インターフェイスの人文学」事務局までお問い合わせください。ホームページによる内容の公開も計画中です。

1 岐路に立つ人文科学

007	《インターフェイスの人文学》というプロジェクト 鶴田清一
015	第1部 変容する人文学の課題
016	越境する歴史学—interface 人文学として 川北稔
045	Zwischen Weltoffenheit und Ethnozentrismus — Rolle des Kulturradikalismus im Umgang mit der Vergangenheit in Japan Kenichi Mishima
063	日本における技術者倫理教育の射程—技術者と組織の関係を中心に— 浅野敬一
078	トランクショナルな市民的不服従 時安邦治
095	第2部 ワークショップ「現場という領域、情報という領域」
096	趣旨説明
101	プログラム
102	提起1 「現場という領域、あるいは表現者の立場が問われるとき」
121	提起2 「情報という領域」
137	提起3 「文化の創造と文化研究—研究と実践の間」
149	提起4 「歴史学・歴史教育・歴史認識」
159	提起5 「法というアリーナ」
171	第3部 國際フォーラム「映像の力—日越兩國文化の比較と交流のために」
172	国際フォーラム「映像の力—日越兩國文化の比較と交流のために」 桃木至朗・山口修
191	ペルナ語要旨
199	英語要旨

2 □ トランクショナルティ研究

007	はじめに 小泉潤二・栗本英世
019	第1部 研究領域の脱構築と創造
020	グローバリゼーション・スタディーズの課題 伊豫谷登士翁
031	もう一つの在日一米軍基地の人類学的研究をめぐって 田中雅一
042	日本研究と日本人の自我の人類学—日米の対話 エイミー・ボロヴィイ
057	クバーナは解放されか?—革命キーパーのジェンダー／人類学研究に関する一考察 田沼幸子
071	第2部 基礎概念の再検討—人種、エスニック集団、エスニシティ
072	今ふたたび、人種とは何か—現代の人種主義を見るために 竹沢泰子
084	論争を超えて—エスニシティ研究の経験論的再考 デレジ・フェイサ
107	第3部 移動、アイデンティティ、トランクショナルティ
108	同姓団体による文化復興運動—タイ華人社会の事例から
123	トランクショナルティを考える 吉原和男
137	越境する人々たちを見つめる目 陳天璽
168	トランクショナル・コミュニティにおけるエスニシティの形成 一之川千恵
183	マレーシア・ペナンの宗教組織と華文教育に関する人類学的研究の課題と展望 黄蘿
196	蜜柑のシニフィー—北九州における開発の記憶と在日同胞の存在についての試論 太田心平
	移民・コミュニティにおける宗教実践上の差異と調整 一台湾ムスリム社会における泰総ムスリム／外省ムスリム間の差異を事例として 木村自
209	第4部 地域からの視点とトランクショナルティ研究
210	東南アジア島嶼部のフレンチア空間 一ボルネオ島西部インドネシア／マレーシア国境地帯からの視点 石川登
222	海城アジア史構築の可能性—わたしの地域研究法 赤嶺淳
235	東印度ネシア、クバンにおけるくす屋の生活の実践 斎田良成
249	あとがき 小泉潤二
251	執筆者紹介

3 △ シルクロードと世界史

021	はじめに 森安孝夫
023	「コージュード=フランス講演録 ウィグル=マニ教史特別講義」 森安孝夫 Four Lectures at the Collège de France in May 2003. History of Manichaeism among the Uighurs from the 8th to the 11th Centuries in Central Asia. Takaо MORIYASU
024	I. Introduction à l'histoire des Oughours et leur relations avec le Manichéisme et le Bouddhisme. II. Manichaeism under the East Uighur Khanate with Special References to the Fragment Mainz 345 and the Kara-Balgasun Inscription.
039	III. The Flourishing of Manichaeism under the West Uighur Kingdom. New Edition of the Uighur Charter on the Administration of the Manichaean Monastery in Ooco.
049	IV. The Decline of Manichaeism and the Rise of Buddhism among the Uighurs with a Discussion on the Origin of Uighur Buddhism. [トニーク碑文研究史概論] 鈴木宗範
113	〔晉氏帰義軍時代の外交関係文書〕 赤木崇敏
131	〔敦煌判憲書考索序説〕 坂尻彰宏
159	〔西夏法典貿易関連条文訳註〕 佐藤貴保
197	〔全国高等学校世界史教員研修会〕 森安孝夫／山内晋次
257	

4 ▲ イメージとしての〈日本〉

007	はじめに 伊井春樹
009	21世紀COE「インターフェイスの人文学」日本文学国際研究集会 「日本文学の魅力／翻訳の可能性」概要報告
013	シンポジウム 日本文学の魅力—留学生にとっての日本文学研究
014	パネラー・司会紹介
015	シンポジウム 日本文学の魅力—留学生にとっての日本文学研究一 海野圭介
019	古典文学が今日持つ意味 タケシ・ワタナベ
023	台湾における日本文学研究の現状について 廖秀娟
029	台大における日本文学—その沿路—マッターネー・チャトウラセンパイロート
033	古典文学と翻訳 テレサ・マルティネス・フェルナンデス
038	カジュアル・ソーシャル・コードネイク ジャック・ストーンマン
043	柳宗悦の朝鮮芸術論—韓国人による評価の概観— 金容菊
049	シンポジウム 日本文学 翻訳の可能性
050	パネラー・司会紹介
051	シンポジウム 日本文学 翻訳の可能性 伊井春樹
053	翻訳の危機 翻訳の価値 エドワード・ケインズ
058	The Dangers of Translation and the Value of Translation Edward Kamens
065	和歌の現代語訳と翻訳—伊勢物語を中心に— ジョシュア・モストウ
074	Modern Renditions and Translation of Japanese Classical Poetry, With Special Reference to Tales of Ise Joshua Scotto Mostow
082	与謝野晶子の『新説源氏物語』—その語訳の意義を中心に— ゲイ・ローリー
090	誠談、それとも正確か? 遠藤周作文学を試してみて マーク・ウイリアムズ
101	Fidelity, or Accuracy? On Translating Endō's Literature Mark Williams
115	補足・質疑・応答
134	日本古典文学翻訳データベース Alphabetical list of translations of classical Japanese works up to 1600 マイケル・ワソン 綠川真知子

5 言語の接觸と混交

- 007 まえがき 真田信治
 009 第1部 ブラジル日系社会と日本語
 010 はじめに 記録・保存事業について 山東功
 014 第1章
 ブラジル日系社会と日本—研究調査概要とその背景一
 ブラジル日系社会の成立—日本移民小史— 森幸一
 016 アリアンサ移住地—スザノ入植地について 浅野卓夫
 020 ブラジル多言語環境における日系社会の言語 Elza Taeko Doi
 023 研究調査結果概略 ブラジル日系社会調査班
 027 第2章
 移民社会と言語接触—言語生活調査について一
 日系社会調査と言語生活 森幸一
 034 言語生活調査概要 エレン・ナカミズ 浅野卓夫
 052
 060 第3章
 語話資料から見えてくるもの—移民社会と日本語の変容一
 062 語話口述調査について 李吉鉉 レオナルド・メロ
 067 語話口述調査概要 中東靖恵
 078 第4章
 移民社会の言語問題—日系社会における日本語と日本語教育一
 080 ブラジルの日本語教育 佐々木信子
 088 ブラジル日系人の「日本語」を巡る状況と言説—1908年から1941年まで— 森幸一
 105 おわりに 工藤真由美
- 107 第2部 日系ブラジル人をとりまく日本社会 一通時的、共時的次元から一
 109 はじめに 津田葵
 110 第1章
 ブラジル移民への葉(しおり) 一横浜・神戸・船上の移民教育— 横田睦子
 124 第2章
 日系ブラジル人のコミュニケーション: 广島県東部地域の事例研究
 125 まえがき 津田葵
 126 カトリック教会における外国人信徒との共生への歩み
 広島教区における日系ブラジル人を中心の一 津田葵
 140 日系ブラジル人の家庭をとりまく現状—ごとばの問題を中心に一 高阪香津美
 150 日系ブラジル人の子どもたちと日本の学校社会 前村奈央佳
 160 日系ブラジル人を取り巻く地域社会における現状と課題 新庄あいみ
 169 聴場における共生に向けて
 一日本人と日系ブラジル人従業員の意識調査から一 服部圭子
 180 第3章
 地域社会及びNGO／NPOの取り組み
 181 まえがき 山下仁
 182 地方自治体の取り組み: 潤賀県内の市町村を例に リリアン・テルミ・ハタノ
 187 共生に向けた地域の日本語教室の役割と課題 森本郁代
 195 ホスト住民の多文化共生に関わる意識
 一大阪府民に対するアンケート調査より一 松尾慎
 203 日系ブラジル人をめぐる国会での答弁 山下仁



7 臨床と対話

- 007 はじめに 中岡成文
 009 第1部 臨床哲学から
 もの・ひと・とき—「臨床と対話」のために 中岡成文
 010 予防原則の哲学的考察
 一科学技術と社会の新たな倫理的関係の構築のために一 屋良朝彦
 023 対話のインセンティーネ—子どもたちとの「楽しい」対話のために 高橋綾
 035 第2部 NGOと公共的な対話
 NGOと公共性の問題の一事例
 一ネパールのブーター難民キャンプを訪問して一 入江幸男
 049 ブーターン難民の過去・現在・未来 ラタン・ガズメル
 052
 060 第3部 死の臨床をめぐって
 068 アジアにおける死の臨床に関する研究の動向
 069 アジアにおける死の臨床に関する心理学的研究 安部幸志・恒藤曉
 079 中国人の生死観—家族にまつかる視点から一 王健・安部幸志・恒藤曉
 084 死の臨床におけるスピリチュアリティ研究の動向—比較文化的観点より一
 森田敏史・安部幸志・恒藤曉
 093 東アジアにおけるアヴァンス・ディレクティブの発展と研究の動向
 船原徹雄・大橋陽・安部幸志・恒藤曉
 102 第2章 遺族支援システムの構築に向けて—医療現場における遺族支援の現状と課題一
 ホスピビ・緩和ケア病棟における遺族支援 坂口幸弘・恒藤曉
 104 大阪府下のある公立総合病院における遺族支援 坂口幸弘・恒藤曉
 111 遺族支援に対する看護師の意識 坂口幸弘・恒藤曉
 115
 123 第4部 記憶と対話
 124 記憶・対話・そして集合的な想起 近藤佐知彦
 146 記憶の伝承に関するグループ・ダイナミックス 渥美公秀
 161 記憶の空間的位置: 記憶装置としての博物館に関する一考察 関嘉寛
 177 博物館の展示を見ることという経験 谷本奈穂
 189 「記憶と対話」研究に向けて: 台湾集集大地震の被災者の語りを踏まえて 加藤謙介
 201 「佐伯敏子さんの語り」について: 付属資料の解説
 207 佐伯敏子さんの語り (本報告書への収録者) 渥美公秀
 242 臨床的灾害救援システムの構築に向けて 渥美公秀
 255 地域防災プログラムのマニュアルの意義 渡邊としえ
 262 あとがき 渥美公秀

8 映像・音響記録DVD

- 006 まえがき 園府寺司
 008 第1部 メディア関連事業についての報告
 009 人文学データベース 豊穰な海の創出 園府寺司
 014 國際多地点講義・シンポジウム配信システム 前迫孝憲・内海成治・伊井春樹
 035 メディア教育とスタッフ 園府寺司
- 038 第2部 映像・音響記録DVDコンテンツについて
 039 映像・音響記録DVDコンテンツ紹介
 040 人文学データベース 園府寺司
 041 國際多地点講義・シンポジウム配信システム 前迫孝憲・内海成治・伊井春樹
 044 國際多地点講義・シンポジウム配信システム 前迫孝憲・内海成治・伊井春樹
 046 シンポジウム「表演芸術における映像記録化」 山口修
 048 第3回国際デザイン史フォーラム「画像と文字」 藤田治彦
 050 ヨーゼフ・ラスカ(父の愛)
 一20世紀初頭におけるパレス・バントマイム芸術の再構築に向けて一
 1 音楽から映像知へ—ラスカ(父の愛)のパレス・バントマイム上演に向けて一 根岸一美
 2 オーケストラ上演地の道のり 岡村睦
 3 オーケストラ音楽用楽譜の作成について 福本康之
 4 オーケストラ音楽用楽譜の作成に関する報告 竹下美穂・満洲悠里・山本信乃
 5 脚本と楽譜から身体と音楽へ橋渡しとしての字幕一 岡村睦
 6 ピエロの悲劇を奏でる身体 伊藤友子
 7 デジタル・メディア時代の芸術研究—データベースとデジタル・メディア環境の整備一 園府寺司
 8 東欧EMDNIMズム・ワークショップ(檀德堂春季講座) 三谷研爾
 9 あとがき 藤田治彦

Achievement

「インターフェイスの人文学」関連業績一覧

プログラム採択（2002年11月）以来2003年12月調査分まで（刊行予定を含む）の、研究に参加した教員、RA、TA、その他研究協力者による研究業績のリストである。「インターフェイスの人文学」報告書所収論文は除く。今回は、1. 編著書、2. 雑誌論文、3. その他論文集等に掲載の学術論文の3種を掲載する。グループ別・著者名の50音順に配列している。なお、その後の調査に基づく網羅的な業績一覧を別途作成し、冊子として印刷とともにホームページで公開する予定である。

1. 編著書

著者	書名	著書名等	出版社・発行者	総頁数	出版年
△ 臨床と対話					
河井隼雄・鶴田清一	『臨床と言葉—心理学と哲学のあわいに探る新しい臨床の知』		TBSブリタニカ	238	2003
歴史学研究会（編）	『歴史学における方法的転回』		青木書店		2002
川北稔他（著）					
鶴田清一	『老いの空白』	シリーズ「生きる思想」4	弘文堂	252	2003
鶴田清一	『この「私」はどこにいるのか』	智山文庫・28	真言宗教智派宗務庁	77	2003
鶴田清一	『課題授業 ようこそ先翠●着飾る自分、質素な自分』		KTC中央出版	201	2004
白幡洋三郎（監修）					
サンクトー不易流行研究所（編）鶴田清一・白幡洋三郎・奥野卓司・小長谷有紀・山極寿一（著）	『大人にならざる成熟する法』		中央公論新社	257	2003
鶴田清一（編著）	『(食)は病んでいるか—揺らぐ生存の条件』	ウェッジ選書 14	JR東海	198	2003
□ シルクロードと世界史					
荒川正晴	『オアシス国家とキャラバン交易』	世界史リブレット 62	山川出版社	82	2003
川北稔・桃木至朗（監修）	『最新世界史図説 タベストリー』		帝国書院		2003
山内晋次	『奈良平安期の日本とアジア』		吉川弘文館		2003
山内晋次・他	『摂関政治と王朝文化』	日本の時代史 6	吉川弘文館		2002
□ トランスナショナリティ研究					
Koizumi, Junji	Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim: Anthropological Studies		Osaka University Press	300	2003
李曉傑	『韓國經野—中國行政區劃的變遷』		長春出版社		近刊
△ イメージとしての日本					
伊藤公雄	『「男らしさ」という神話』		NHK出版	123	2003
伊藤公雄	『「男女共同参画」が問いかけるもの』		インパクト出版会	286	2003
金水敏	『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』		岩波書店	225	2003
富山一郎	『暴力の生態—伊波普林における危機の問題』		岩波書店	366	2002
富山一郎	『戦場の記憶』（韓国語）		移山出版（ソウル）	303	2002
△ 言語の接觸と混交					
真田信治・生越直樹（著）	『在日コリアンの言語相』		和泉書院		2004
佐榮哲（編）					
真田信治（編）	『20世紀の日本社会言語学研究文献リスト』（CD-ROM版）		真田信治		2003
横田睦子	『波米移民の教育 一葉で読む日本人移民社会―』		大阪大学出版会	185	2003
工藤真由美（編）	『ブラジル日系社会における言語の総合的研究』	大阪大学大学院文学研究科紀要（モノグラフ編）	大阪大学大学院文学研究科		2004
△ 映像人文学					
Kashiwagi, Takaō	Balzac, romancier du regard		Nizet		2002
柏木隆雄（原著）	『バルザックとこだわりフランスちょっと良い旅』		恒星出版		2003
柏木隆雄（共編著）	『エクリュールの冒険—新編・フランス文学史』		大阪大学出版会		2003
山口修	『応用音楽学と民族音楽学』		東京：放送大学教育振興会		2004
△ 臨床と対話					
稻葉一人	『実践民事訴訟法』		民事法研究会		2003
稻葉一人	『医療・看護過誤と訴訟』		メディア出版		2003
稻葉一人	『調停技法トレーニング中級』		シヴィル・プロネット関西		2002
屋良朝彦	『メルロ=ポンティとレヴィナス—他者への覚醒—』		東信堂		2003

2. 雑誌論文

著者	論文名	雑誌名	巻号	始頁—終頁	学会・出版社等	刊行年
△ 戦略に立つ人文科学						
川北稔	「カリブ海域史への視角」	「日仏文化」	68号	107-123		2002
三島憲一	「ニーチェ—ヨーロッパへの懷疑とその落とし穴」	「環」	別冊5 「ヨーロッパ とは何か」	356-367	藤原書店	2002

鷲田清一	「強い「自立」よりも弱い「相互依存」を」	『中央公論』	2003年 4月号	中央公論新社	2003
鷲田清一	「〈民族〉と〈モード〉」	『民族藝術』		日本民族藝術学会	2004
鷲田清一	「街ごとの意味?」	『倫理学研究』		関西倫理学会	2004
□ ランクナショナリティ研究					
太田心平	「人類学における知識の二元論と再一元化—韓国朝鮮研究からの理論的鳥瞰」	『年報人間科学』	vol.24	33-48	2003
太田心平	「政治と発話—現代韓国の政治文化を構築する「誤解」」	『民族学研究』	68巻1号	44-64	2003
全京秀(著) 太田心平(訳)	「日本の植民地・戦争人類学はいま—台北帝大と京城帝大の人脈と活動を中心にして」	『思想』	957号		岩波書店 2004
亀山俊朗	「社会政策の変容とヒンディズンシップのゆくえ」	『年報人間科学』	第24号	251-268	2003
樋口明彦・亀山俊朗	「若年無業・不安定就労者の自立支援事業の調査研究—大阪地域職業訓練センターの現状と課題」	『季刊家計経済研究』			2004 掲載予定
三島寛一・木村利秋(共訳)	「J・ハーバーマス「コミュニケーション的行為と理性的超越論化」上・下」	『思想』	No.954		2003
木村自	「移民と文化変容—台湾回民社会における聖紀祭礼の変遷と回民アイデンティティ」	『年報人間科学』	vol.24	49-65	2003
後藤正憲	「結核と革命」	『スラヴ研究』	第50号	269-283	2003
後藤正憲	「社会主義と結核—ソビエト・ロシアの身体的構築」	『人間科学研究』	第5号	209-218	2003
田中雅彦	「メキシコ農地改革における一村落の指導者をめぐる語り」	『ラテンアメリカ研究年報』	第24号		2004
中井潤子	「ビルマのヒンドゥー教徒の農村から都市への移動」	『国際文化学』	8号	149-157	2003
中井潤子	「ビルマの南アジア系移民のホスト社会への「適応」」	『ばるるす』	2号	1-22	2003
中川敏	「宗教とは何か」とは何か」	『民族学研究』	68巻2号	262-279	2003
樋口明彦	「現代社会における社会的排除のメカニズム—積極的労働市場政策の内在的ジレンマをめぐって」	『社会学評論』	217		2004
松川奈子	「私のことば、あなたのことば—「母語」という文化的な装置と言語ナショナリズムを巡って」	『年報人間科学』	vol.24	67-86	2003
高橋鹿根	「弱いナショナリズム」の形成と展開—ウズベキスタンにおける民族・歴史・国家」	『人間科学研究』	第5号	197-208	2003
全子えりか・山田仁史(訳・解説)	Wiedfeldt, Otto 「ヴィートエリート、O「小特集・ヴィートエルトの台湾原住民研究」	『台灣原住民研究』	7	3-95	2003
李曉傑	《戰國時期魏國疆域變遷考》	『歴史地理』	第一九輯	74-88	上海人民出版社 2003
李曉傑	《戰國時期趙國疆域變遷考述》	『九州』	第三輯	147-171	商務印書館 2003
△ イメージとしての日本					
表智之・伊藤透	「大学ポップ化計画—大阪大学がピュアカルチャー研究センターの展望—」	『マンガ研究』	第4号	140-148	日本マンガ学会 2003
伊藤公雄	「学術の再点検—男性学／男性研究の視点から」	『学術の動向』	2003年 4月号	20-23	日本学术会議 2003
伊藤公雄	「パックラッシュの構図」	『女性学』	第11号	10-21	日本女性学会 2004
♪ 言語の接触と混交					
中東靖惠・Leonardo A. de P. MELO	「ブラジル日系社会における言語の総合的研究へ向けて(1)」	『岡山大学文学部紀要』	第39号	67-82	2003
山東 功	「ブラジル日系人の日本語への視点」	『女子大文学(国文篇)』	54		大阪女子大学人文社会学部 日本語日本文学専攻紀要 2003
DEMARINI, Zelia de Brito Fabri DEMARTINI, Zelia de Brito Fabri & ESPOSITO, Yara Lúcia	Relatos orais de famílias de imigrantes japoneses: Elementos para a história da educação brasileira "São Paulo no início do século e suas escolas diferenciadas"	Educação & Sociedade	ano XXI, n. 72,	43-72	2000
卯 映像人文学					
柏木隆雄	「バルザック『シャベール大佐』におけるまなざし」	『関西フランス語フランス文学』	第9号		2003
国府寺司	「ファン・ゴッホ展覧会史 作品移動、市場、メディアから見た美術研究への序論」	『西洋美術研究』	10号		2004
篠田曉子	「民族芸能が生まれた時—バの芸能(ケチャ)の場合—」	『民族藝術』	第20巻		民族藝術学会 2004
藤田治彦	「英国の文化財保護：ナショナル・トラストと古建築物保護協会」	『民族藝術』	第19巻	50-54	民族藝術学会 2003
藤田治彦	「アーツ・アンド・クラフツと工芸の変貌—ウイリアム・モ里斯と柳宗悦をめぐって」	『美学』	第213号	14-26	美学会 2003
Fujita, Haruhiko	L' AGONIA DEL MONTE"	Parametro	Vol. 245	36-37	Parametro, Bologna 2003
山口修	「耳から口へ、口から耳へ、そして音楽」	『イキイキ音楽療法のしごと場』	2	104-107	東京：あおぞら音楽社 2003
卯 臨床と対話					
赤林朗・稻葉一人	「生命・医療倫理の現状と将来」	『医学のあゆみ』	196巻2号	165-168	2001
渥美公秀	「語りのグループ・ダイナミックス」	『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』			大阪大学大学院 人間科学研究科 2004
渥美公秀	「台湾集集地震における救援活動の記録」	『ΣΥΝ(ボランティア人間科学講座紀要)』	vol.4 (2)	243-254	大阪大学大学院 人間科学研究科 ボランティア人間科学講座 2003
渥美公秀	「災害時のボランティア活動と自治体」	『地方議会人』	33 (11)	27-30	中央文化社 2003
稻葉一人	「がんのICと法と倫理」	『別冊ターミナルケア』	13巻3号	178-185	青海社 2003
稻葉一人・長尾典子	「根能する病院内臨床倫理委員会」	『看護管理』	13巻4号	263-268	医学書院 2003
稻葉一人	「医療における意思決定—終末期における患者・家族・代理人」	『医療・生命と倫理・社会』	2号	34-51	大阪大学大学院医学系研究科・医の倫理学教室 2003
稻葉一人	「食べること法」	『臨床哲学』	4号	46-61	大阪大学大学院医学系研究科・臨床哲学 2002
稻葉一人	「遺伝子情報を巡る倫理的・法的諸問題」	『医療・生命と倫理・社会』	1号	76-85	大阪大学大学院医学系研究科・医の倫理学教室 2002
稻葉一人・赤林朗	「疫学と個人情報保護を巡る倫理と法との交錯」	『生命科学』	12巻B	23-33	2002
稻葉一人・長尾典子	「神經幹細胞の応用の倫理問題」	『Clinical Neuroscience』	別冊20巻1号	102-108	中外医学社 2002
加藤謙介	「台湾集集大地震における被災者の語り—「記憶と対話」研究に向けた予備の考察」	『ΣΥΝ(ボランティア人間科学紀要)』	vol.4 (2)	357-366	大阪大学大学院 人間科学研究科 ボランティア人間科学講座 2003
諫訪晃一	「総合的な学習の時間」における「自己」と「語り」—松原市立布忍小学校の実践から—	『ΣΥΝ(ボランティア人間科学紀要)』	vol.4 (2)	391-416	大阪大学大学院 人間科学研究科 ボランティア人間科学講座 2003

関嘉寛	「博物館という空間」	「大阪大学大学院人間科学研究科紀要」			大阪大学大学院人間科学研究科	2004
関嘉寛	「記録と記憶の伝承—『臺灣總督府 昭和十年臺灣震災誌』解題—」	「SYN (ボランティア人間科学紀要)」	vol.4	243-254	大阪大学大学院人間科学研究科 ボランティア人間科学講座	2003
中岡成文	「(精神の力)としての権利—ヘーゲルのRecht論に寄せて」	「倫理学研究」	第33集	31-44	関西倫理学会	2003
中岡成文	「表現と制作—西田幾多郎と三木清のディルタイ批判」	「ディルタイ研究」	第14号	5-18	日本ディルタイ協会	2003
Yamanaka, H.	“Scandal and Psychiatry in early nineteenth-century Prussia”	History of Psychiatry	14[2]	139-160		2003
屋良朝彦	「言葉における存在の彼方 一メルロー=ポンティ・デリダ・レヴィナスの思考をもとに—」	「哲学」	第38号	19-36	北海道大学哲学会	2002
◆メディア						
今井亞湖、山城新吾、 松河秀哉、山田雅行、 前迫孝憲、芝尾光信、 奥地耕司、伊原和夫	「インターネットを媒体とした超鏡(HyperMirror)システム利用の試み」	「教育システム情報学会誌」	Vol.19 No.4	261-266	教育システム情報学会	2002
松下幸司、今井亜湖、 前迫孝憲、埴岡靖司、 吉富友恭	「動画像デジタルコンテンツが児童の学習活動に与える効果に関する一研究」	「教育システム情報学会誌」	Vol.19 No.4	267-271	教育システム情報学会	2002
吉富友恭、埴岡靖司、 今井亞湖、松下幸司、 前迫孝憲	「河川生態系に対する児童の意識調査に基づいた環境学習のカリキュラムデザイン」	「日本教育工学会誌」	Vol.26, Suppl.	187-192	日本教育工学会	2002
吉富友恭、吉田 健、 松下幸司、前迫孝憲 吉本優子、武藤志真子、前迫孝憲	「利用者による評価・検証を組み込んだ展示開発—河川に関する研究解説パネルを例に—」	「環境システム研究論文集」	Vol.30	391-400	土木学会	2002
吉富友恭、吉田 健、 松下幸司、前迫孝憲 吉本優子、武藤志真子、前迫孝憲	「食生活の自己管理に対する自己効力感尺度の開発に関する研究」	「Health Sciences」	Vol.19 No.2	99-111	The Japan Society of Health Sciences	2003
松河秀哉、重田勝介、 吉田 健、前迫孝憲、 景平義文、間 嘉寛、 内海成也、中村安秀、 下條真司、井上聰一郎、 中村一彦、下山 富男、吉田雅巳	「アフガニスタン—大阪間の遺稿講義の国際配信」	「日本教育工学会論文誌」	Vol.27, Suppl.	255-259	日本教育工学会	2003
加藤英徳、小池敏英、 前迫孝憲、雲井未歎、 大川佳美、成 基香、 渡邊流理也	「高選択性赤外外光線能画像法NIRS-Imagingによるプローカ野の脳血流動態と局在化 に関する検討」	「臨床脳波」	Vol.46 No.1	20-32	永井書店	2004

3.その他論文集等に掲載の学術論文

著者	論文名	編者等	頁名	著者名等	始頁—終頁	出版社	出版年
△ 既路に立つ人文科学							
三島憲一	「原理主義的ナショナリズムの宿命—西尾幹二氏は原理主義者だから、議論 菅原憲二、 安田浩(編)」	Corneließen, Christo- phor, Klinkhammer, Lutz und Schwent- ker, Wolfgang(hg.)	『国境を貫く歴史認識』		80-112	青木書店	2002
Mishima, Kenichi	“Generationswechsel und Erinnerungskulturen in Japan”	Ameling, Ivo, Koch, Matthias, Kurtz, Joachim, Lee, Eung-Jeung, Saaler, Sven(hg.)	Erinnerungskulturen, Deutsch- land, Italien und Japan seit 1945		344-358	Frankfurt (Fischer Taschenbuchverlag)	2003
Mishima, Kenichi	Ästhetisierung zwischen Hegemoniekritik und Selbstbehauptung		Selbstbehauptungsdiskurse, in Asien - China, Japan, Korea		25-48	München	2003
三島憲一	「世界周航記」と啓蒙の再読		ゲオルク・フォルスター「世界周航記」 下巻			岩波書店	2003
鷺田清一	「臨床と言葉」	文部科学省補助金科 学研究費報告書 中島義明・太田裕彦 (編)	『看護の現象学的研究』		106-121		2003
鷺田清一	「流行」		『人間科学の可能性』			放送大学教育振興会	2003
鷺田清一	「意識の皮膚」	成実弘至(編)	『身体モード論』		36-61	京都造形芸術大学 通信教育部	2003
鷺田清一	「意識の皮膚」	京都造形芸術大学 (編) 成実弘至(責任編集)	『身体モード論』		36-61	角川書店	2003
△ シルクロードと世界史							
佐藤貴保	「西夏関連研究文献目録 2000 年度版」		『瀚海蒼茫—ユーラシア歴史学の構 築をめざして—』		1-79	総合地球環境学研究所	2003
桃木至朗	「東南アジア史研究の過去・現在・未来」	石井米雄ほか(編)	『岩波講座東南アジア史別巻 東南 アジア史研究案内』		1-14	岩波書店	2003
桃木至朗	「東南アジア史整理のポイント」		『歴史と地理』 561 世界史の研 究 194		1-11	山川出版社	2003
桃木至朗	「注目の一冊 3 東南アジアの王権論」	石井米雄ほか(編)	『岩波講座東南アジア史別巻 東南 アジア史研究案内』		27-32	岩波書店	2003
桃木至朗	「注目の一冊 12 「交易の時代」以後の東南アジアと朝鮮」	石井米雄ほか(編)	『岩波講座東南アジア史別巻 東南 アジア史研究案内』		67-71	岩波書店	2003
Moriyasu, Takao	“Uighur Inscriptions on the Banners from Turfan Housed in the Mu- seum for Indische Kunst, Berlin.”	Chhaya Bhattacha- rya-Haesner	Central Asian Temple Banners in the Turfan Collection of the Mu- seum für Indische Kunst, Berlin Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, Beri- chete und Abhandlungen, Band 9		461-474	Berlin, Dietrich Reimer Verlag	2003
Yoshida, Yutaka	“In search of traces of Sogdians ‘Phoenicians of the Silk Road’”	D. Durkin-Meister- ernst (ed.)	Turfan revisited: The first century of research into the arts and cul- tures of the Silk Road		185-200		2002
Yoshida, Yutaka	“Chamuk: A name element of some Sogdian rulers”					Berlin	2003
△ トランシナショナリティ研究							
太田心平	「『日本の 지역 활성화 사례 (日本における地域活性化の事例)』」	オックスフォード生活村 通常委員会(編)	『オンス生活村基礎調査報告書』		151-187		2002
太田心平	「過去を養う—清川とソウルの寄せ場から」	韓国・朝鮮文化 研究会(編)	『韓国朝鮮の文化と社会』 2巻		309-314		2003
春日直樹	「物語ること」	森明子(編)	『歴史叙述の現在』		196-220	人文書院	2002

Kasuga, Naoki	"A Micro Island State and its Indigenous Culture in the Age of Global Capitalism"	Koizumi, J., (ed.)	Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim: Anthropological Studies 『比較文化のアジア—所有・契約・市場・公正』	155-171	Osaka University Press	2003
春日直樹	「公正の『臠床』」	三浦徹・岸本美緒・閑本照夫 (編)	『地城研究論集』(特集:「9・11」以降、世界は変わったのか) 5巻1号	263-280	東京大学出版会	2004
栗本英世	「9・11 事件とアフリカ—マリアとスーダン」		Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim: Anthropological Studies 『地城研究論集』(特集:「9・11」以降、世界は変わったのか) 5巻1号	82-85		2003
Koizumi, Junji	"Economic Change and Cultural Constancy: Migrant Labor, Coffee Production and Communal Identity in Huehuetenango, Guatemala"	Koizumi, J., (ed.)	Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim: Anthropological Studies 『地城研究論集』(特集:「9・11」以降、世界は変わったのか) 5巻1号	243-272	Osaka University Press	2003
Dereje, Feyissa	"The Socio-economic Status of Artisans among the Oyda of Southern Ethiopia"	D. Freeman & A. Pankhurst (eds.)	Peripheral peoples: the excluded minorities of Ethiopia 『地城研究論集』(特集:「9・11」以降、世界は変わったのか) 5巻1号		London: Hurst and co.	2003
Dereje, Feyissa	"Conflict and Identity politics: The Case of Anywaa-Nuer Relations in the Gambela Region"	G. Schlee and E. Watson (eds.)	Changing identification and alliances in Northeast Africa 『地城研究論集』(特集:「9・11」以降、世界は変わったのか) 5巻1号		to be published by James Currey	近刊
Dereje Feyissa and Schlee, G.	"Fulbe Migrations to the Sudan and Ethiopia"	G. Schlee and E. Watson (eds.)	Changing identification and alliances in Northeast Africa 『地城研究論集』(特集:「9・11」以降、世界は変わったのか) 5巻1号		to be published by James Currey	近刊
Dereje, Feyissa	"Ethnic Federalism and Conflicting Political Projects: The Case of Anywaa-Nuer Relations in the Gambela Region"		Proceedings of the 15th international conference on Ethiopian studies 『地城研究論集』(特集:「9・11」以降、世界は変わったのか) 5巻1号		to be published by University of Hamburg	近刊
Dereje, Feyissa	"Contesting Autochtony: Strategies of Land Entitlement among the Nuer of the Gambela Region"	Dafinger and Bar-ends (eds.)	The Landed and the landless: Strategies of Territorial Integration and Dissociation in Africa 『地城研究論集』(特集:「9・11」以降、世界は変わったのか) 5巻1号		to be published in Africa (Special Issue)	近刊
Dereje, Feyissa	"Land and the Politics of Identity, the Case of Anywaa-Nuer Relations in the Gambela Region, Western Ethiopia"	Evers and Spierenburg (eds.)	Competing Jurisdictions: Settling Land Claims in Africa 『地城研究論集』(特集:「9・11」以降、世界は変わったのか) 5巻1号		to be published by Brill Academic publishers	近刊
Dereje, Feyissa	"Decentralisation as Ethnic Closure: The Experience of Ethiopia"		Decentralisation and Development, Journal of Africa Development 『地城研究論集』(特集:「9・11」以降、世界は変わったのか) 5巻1号		to be published by CODESRIA	近刊
Nakagawa, Satoshi	"On the Endenese Labour Migration to Malaysia."	Koizumi, J., (ed.)	Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim: Anthropological Studies 『地城研究論集』(特集:「9・11」以降、世界は変わったのか) 5巻1号	35-49	Osaka University Press	2003
山田仁史	「華南・東南アジアの洪水神話におけるヒュウタン」	篠田知和基 (編)	『補陀洛迦海 死への船出: 東西の説話から』	74-83	広島:GRMC	2003
山田仁史	「環太平洋における神話の共通性: 研究史の素描」	篠田知和基 (編)	『神話・象徴・文学』III 『賽夏族趙旺草遺稿集 祭典・伝説編』			近刊
山田仁史	「解説 サイヤート族の神話伝説と祭典について」		『1999 台湾原住民国際研討會論文集』(仮題)			近刊
山田仁史	「台灣原住民における命名、達名制と死者への態度: サイヤート族の事例から」		『〈古代中外關係: 新史料の讀、整理與研究〉國際學術研討會論文集』			近刊
李曉傑	「十九世紀早期在華傳教士所描繪的美國: 高理文及其《美理哥合士國志略》」				科學出版社	近刊
⇒ イメージとしての日本						
伊井春樹	「国際化のなかの日本文学研究」		『異文化理解の視座』		東京大学出版会	2003
伊藤公雄	「戦後男の子文化のなかの『戦争』」	中久郎 (編)	『戦後平和のなかの戦争』		世界思想社	2004
伊藤公雄	「高齢社会と『男性問題』」	清水博子 (編)	『夫は定年、妻はストレス』	267-280	青木書店	2003
Tomiyama, Ichiro	"The 'Japanese' of Micronesia,"	Ronald Y. Nakasone(ed.)	Okinawan Diaspora 『小森陽一・千野香織・酒井直樹・成田龍一・島園進・吉見俊哉 (編)』	57-70	University of Hawaii Press	2002
富山一郎	「国境」		『日本の文化史 4 感性の近代』	207-231	岩波書店	2002
富山一郎	「世界市場に夢想される帝国」	豊見山和行 (編)	『日本の時代史 18 琉球・沖縄史の世界』	267-288	吉川弘文館	2003
富山一郎	「対抗と進行」(中国語)		『中外文學』(台湾大学) 第31巻7期	33-62		2002
♪ 言語の接触と混交						
Tsuda, Aoi	"Language, Culture and Ethnicity of the Bonin Islands, Japan"		Changing Japanese Identities in Multicultural Canada	103-111	Canada:University of Victoria Press	2003
Tsuda, Aoi	"Persuasive Discourse-Homiletics on Easter in Japanese and American Catholic Speech Communities"		Approaches to Style and Discourse in English	225-236	Osaka ; Osaka University Press	2004
DEMARTINI, Zelia de Brito Fabri	"Escolas Japonesas em São Paulo: elementos para a história da educação brasileira"		Evento comemorativo dos 90 anos da Imigração Japonesa no Brasil	3-22	São Paulo: Faculdade de Educação/USP	1998
KREUTZ, Lúcio	"A educação de imigrantes no Brasil"	LOPES, Eliane Marta Teixeira et al (org.)	500 anos de Educação no Brasil	347-370	Belo Horizonte: Autêntica, 3 ed.	2003
▷ 疾患人文学						
柏木隆雄	「バレザックと馬琴」		『獨協大学国際フォーラム 2001 年度報告書』			2002
柏木隆雄	「ゾラ、紅葉、花袋 ー日本近代小説への道ー」		『環』		藤原書店	2003
圓府寺司	「モンドリアン 新しい世界の幻視者」	永井隆則 (編)	『越境する造形ー近代の美術とデザインの十字路』	148-162	晃洋書房	2003
△ 臨床と対話						
稻葉一人	「倫理概論」		『MR継続教育テキスト』II-8-36		エゼルピア・サイエンス㈱	2003
稻葉一人	「生命倫理と科学技術の社会的な規制」		『生命科学と現代社会』第5巻	243-254	実教出版	2002
Yamanaka, H.	"How Scandal made a Psychiatrist: the Socialization of medical practice in the early nineteenth century"	Hamanaka & Berrios (eds.)	Two Millennia of Psychiatry in West and East Background, History, and Practice in the United States and Japan, Empirical Bioethics in Cultural Context: Genetic Confidentiality, Ownership and Public Participation in the United States and Japan	155-164	Gakuju Shoin	2003
Yamanaka, H.	"Ownership of Human Biological Materials in the Age of Biotechnology"			74-90	Department of Science & Technology Studies, Cornell University & Institute of Comparative Culture, Sophia University	2003

全国高等学校世界史教員研修会報告

山内晋次

森安季夫教授を代表とする、われわれ「シルクロードと世界史」班は、本COEプログラムにおける主要な研究目標として、
・陸と海のシルクロード関係史料の収集・公開・分析と、多言語史料・
映像資料を統合した新しい「世界史」研究法の構築

・上記の研究を中心とした最新の歴史学による「高校世界史教育」を刷新する方法の開発・実践

の二つを掲げている。そして、後者の研究目標の実現のために、大学の研究現場と高校の教育現場との対話・連携の場という、まさに「インターフェイス」の場を創出すべく、昨夏、全国の高等学校世界史教員を対象とする研修会を開催した。

現在の日本の社会人の世界史認識においては、高校時代の世界史教育がその延長線上にある受験世界史が基本的な枠組みとなっている場合がほとんどであると考えられる。しかし、現在の世界史教育は、ヨーロッパや中国を「中心」・「勝者」とする史観の呪縛を強く蒙つてゐるといわざるをえない。そこで、本研修会では、このような歴史の見方からの脱却を主要な目的の一つとして從来の史観では「周辺」・「敗者」としかみなされていない「中央ユーラシア」・「東南アジア」・地域の歴史や「海陸史」の分野を主題にすべく、公平・対等な立場につたった世界史研究の最前線の成果を提示しようとした。

また、われわれは、現在の日本の歴史教育における大きな問題点として、大学の研究現場と学校の教育現場とをとり結ぶ者の層の薄さを痛感している。そしてこのようない状況のなかで、高校教員こそが、この重要な役割を担うべき高度職業人であると認識している。そこで、われわれは、本研修会のもう一つの主要目的を、このような重要な立場にある高校教員と対話を通じて新たな世界史教育を創造していくための場の確保と継続という点においていた。

森安季夫（大阪大学大学院文学研究科教授）

「世界史上における中央ユーラシアの意義—早すぎた征服王朝としての安史の乱—」

桃木至朗（大阪大学大学院文学研究科教授）
「現代世界とあたらしい歴史学・歴史教育」

荒川正晴（大阪大学大学院文学研究科教授）
「東南アジア史の枠組みを教える方法」

川北稔（大阪大学大学院文学研究科教授）
「ヨーロッパとアジア—近代世界史のバースヘクティウム」

白須淨真（比治山大学講師）
「シルクロード上のソグド人」

杉山清彦（日本学術振興会特別研究員）
「清帝国と海域アジア・内陸アジア—世界史上の一六〇—八世紀—」

白須淨真（比治山大学講師）
「新しい世界史教育の創造をめざして」

山内晋次（大阪大学大学院文学研究科COE特任教員）
「遣唐使途絶後の日本とアジア—九〇—三世紀のヒト・モノの交流」

各講義終了後の質疑応答や質問表では、冊封体制論・遊牧国家の構造、「民族」の定義・具体像、アジアの海域ネットワーク、ソグド人の商業ネットワーク、歴史学が学ぶことの意味・歴史学が歴史教育に提示するものなどのさまざまな問題をめぐって、各講師と参加教員との間で積極的な意見交換が行われた。そして、全講義の終了後、講義内容以外のさまざまな問題も含めた総合討論が行われ、世界システム論・「民族」・「国家」の定義、シルクロードのネットワーク・高校世界史教育の課題などの問題を中心に、活発な討論が展開された。

研修会の概要

本研修会は、二〇〇三年八月五日から七日にかけて、大阪大学附属図書館本館を会場とし、北は岩手県から南は福岡県までの高校世界史教員七名の参加を得て開催された。三日間の研修会は、大阪大学の教官を主要メンバーとする講師陣七人による以下のような講義の講義終了後における質疑応答を中心進められた。また、一日目と二日目の研修終了時に、参加教員に質問表を配布し、翌日その質問に講師や大学院生が口頭・レジスマスで回答するというかたちでも意見交換がはかられた。

研修会の成果

三日間にわたる研修会の終了後、参加教員に一〇〇〇字程度のレポートを提出してもらった。以下、おもにそのレポートによりながら、本研修会の成果を概括してみたい。

レポートの中では、「高校の教育現場と大学の研究の場との乖離の緩和が歴史教育の課題の一つとなつていて」という声に代表されるように、研究と教育の現場が大きく乖離しているという問題が、多くの教員によって指摘されている。本研修会の主要目的の一つは、上述のように、このような状況に対しても、両者の直接対話の場を確保し、

最先端の研究成果を提供することにより、少しでもその溝を埋めるというものである。また、双方の場をつなぐ「層としての新たなリーダー」となりうる意識の高い高校教員と積極的な意見交換をはかることも大きなねらいの一つである。



などの点で、研究の最前線からおおいに刺激を受けたと多くの教員が回答している。

このようないい本研修会の目的は、幸いに多くの参加教員に明確に理解され、「歴史研究の現場と歴史教育の現場」とが、双方で、結ばれた非常に価値のある研修会でした、「最先端の研究紹介を通じて教育現場に『石を投じる、まさに流行の産学連携の人文科学版で教学連携とも呼べべき斬新なものであった』」というような声にみられるように、多くの教員から共感の声が寄せられている。そして、「大学から高校教育に対し、学問の成果をもつと発信して欲しいと思います。高校での教育と大学の研究の格差はあって当然ですが、高校の世界の教員はその狭間を埋める存在でありたいと思っています。(中略)顔を突き合わせ同じ場を共有し研究成果を語り合ふ場は絶対必要です。この研修の来年度以降のさらなる発展を願います」というような、来年度以降もの対話の場を継続していく強い要望の声が数多く届けられている。

また、先述のように、われわれは本研修会のもう一つの重要な目的として、旧来の西洋・中国中心史觀からの脱却を掲げた。そして、「中央ユーラシア」・「東南アジア」・「海域史」などを講義主題に据え、世界システム論やネットワーク論などを採用しながら、積極的に斬新な世界史像を提示した。参加教員のレポートでも、「今回の研修を通して、いかに私自身が西欧中心主義の歴史觀にどらわれてきたのか、あるいは「強者」「勝者」の側についても疑念を抱き始めたが、からの歴史觀で單元を構築してきたのかを知らされる機会となつた」、「三日間の集中講義をつうじて端的に示されたのは、ヨーロッパ中心主義的な発想から抜け出し、また一国史的な見方から脱却することによって、從來の「世界史」認識を転換させねばならないということであった。そしてそれをいかに歴史教育の場でおこなっていくか、これがこのセミナーから高校の教員側に与えられた課題であった」というような声が多數寄せられており、このような新たな「世界史」像の提示も、多くの教員に大きな刺激を与えたことがうかがわれる。

以上のような点以外にも、本研修会における講義、討論を通じて、日本史と世界史の接点の具体的な提示、海域史からの日本史の見直し、柔軟で弾力的なヒトやモノの動き、消費の視点から歴史のダイナミズムを考える手法、教科書的理解の大膽な見直し



山内晋次(やまうち・しんじ)

1961年生まれ。1993年大阪大学大学院文学研究科単位取得退学。
1997年博士(文学)。日本学术振興会特別研究員を経て、現在21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」特任教員。専門は日本古代对外関係史、アジア海域史。主たる著書として、『奈良平安期の日本とアジア』(吉川弘文館、2003年)など。

以上のよう、今回われわれが企画・開催した全国高等学校世界史教員研修会は大きな共感と反響をもつて迎えられ、初回の試みとしては充分な成果をあげることができたといえるであろう。今回の参加教員の一人からは、「今、三・四人が中心となって、この研修に參加したもの同士の勉強会のようなものを大阪で作ろうと考えています。せっかくの機会を何とか生かし、その成果を報告できるように頑張ろうと思っています」というような、高校教育現場における新たな動きもレポートされてきている。このような教育現場における新たな動きとも連携しつつ、今回われわれが創り出した大学の研究現場と高校の教育現場との接点をよりいっそう確実に保持・継続していくため、次年度以降、さらに研究プロジェクトを推進していきたい。(本研修会のより詳しい内容については、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」発行のCOE報告書『シルクロードと世界史』(2003年2月)をご参照いただきたい。)

現在、私は羽曳野市教育員会に勤務している。二〇〇四年三月でまる十五年になる。いわゆる中堅という立場になるのであろうか。当初は市内の文化財保護、とりわけ開発工事に伴う緊急発掘調査に携わっていた。それを十二年間ほど続けた後に、現在の生涯学習の部署に異動し、市民講座の企画や事務を担当している。学部のときから考古学を専攻していたので、埋蔵文化財の発掘については、自分の専門を活かして仕事ができる、少なくとも最初そういう考えていた。しかし、やはりというか、現実はそうあまくは無かつたのである。

羽曳野市では市域の四〇%強が「周知の埋蔵文化財包蔵地」と呼ばれる、法的に保護の対象となる範囲が指定されている。この範囲で土木工事を行う場合は、届出を行う必要がある。私は、特に個人専用住宅の建て替えに伴う発掘を担当していた。正直いって、これは本当に大変な作業であった。なぜなら、個人住宅の発掘は一般には国庫補助金を使うのだが、その申請から実績報告、交付決定に至るまでの事務的手続き書類の作成を、担当者一人でほとんど仕上げなければならないからである。また、発掘作業員やアルバイトの賃金、機械借り上げなどの経費の伝票処理も行うといった始末である。最も手ごわいのが、工事施工業者との折衝である。この協議内容をもとに発掘調査に着手するのだが、価値観の異なる立場での協議は、予想通り難航することがしばしばである。その後首尾よく発掘に突入しても、現場で発生する土ぼこりや泥水で、付近住民より苦言を呈される場合も多々ある。発掘やその後の遺物整理作業はもちろんのことだが、これら調査研究の前提となる上記の業務には、それ以上の精力を注ぎ込むこ

となる。

このような繰り返しに、率直なところ面食らい、とまどいの連続であった。大学で学んだ考古学研究の知識は、今やっている業務の中でどれくらい有益なものなのであろうか。はたと真剣に考え込んでしまうほどであった。一方で、考古学・古代史ブームといわれ、一般市民の関心も高く、その結果新聞やテレビなどのマスコミにも取り上げられることが多い。にもかかわらず、このギャップは一体なぜなのか。大学入学当時に指導教官の一人から「歴史学は、法学や経済学などと違つて鍋や釜のように日常生活には直接役に立たない。しかし、歴史学を研究する者は、普段歴史学の学問を行わない人たちに代わって、研究してその成果を他の多くの人に還元していく必要がある。農業や工業に従事する人が、それに直接携わらない人の分の農作物や製品をも生産するように。」といわれたことを、ふと思い出してしまった。

悪戦苦闘の中、小学校の授業の一環で、市内の遺跡の解説を行つたことがある。お世辞にも上手くできたとは思わなかつたが、関心をもつた数人の子供たちが発掘整理事務所にやつてきた。もつと、モノ（遺物）を見たいのだという。この授業では約一六〇〇年前の埴輪の実物資料を見てもらつたのであるが、どうやら本物に興味を持つたようであつた。また、これらの遺物が普段自分たちが遊び場としている古墳から出土したものであることも、彼や彼女等にとってはちょっとした発見のようであった。このときに次のようと思つた。もちろん、遺跡のもつ歴史的意義の重要性を訴える必要がある。しかし、それだけでは不充分で、何か別の付加価値を創出しなければいけない。例えば、古墳の

伊藤聖浩 (いとう・まさひろ)

1965年生まれ。1988年岡山大学文学部史学科卒業。羽曳野市教育委員会に勤務、また羽曳野市教育委員会市民大学の主查を勤める。大阪大学大学院文学研究科博士前期課程在籍、考古学講座に所属。共著として『羽曳野市史』第3巻資料編1(羽曳野市史編纂委員会、1994年)。

墳丘の雜木林や周濠を利用した周遊散策路の設定、そこで動物や昆虫あるいは植物を対象にした自然観察が自由にできる場の提供、遺跡の広場空間を利用した音楽コンサートの開催など。私の乏しい経験では、市民にとっては、むしろ良好な住環境の保全、あるいは気軽に楽しめる文化イベントへの参加という脈絡から、歴史的遺産に興味や関心を抱く事例が多いように思う。これには、考古学や古代史のみならず、文学、芸術学、生物学、植物学、はたまた環境学や都市計画といった他の学問分野との連携の必要を感じた。



存在する可能性があることには、少しうれしい気がする。

これらの課題として、やはり若い年齢層に対するアピールの方法が挙げられる。これといった妙案を持ち合わせて

いる訳ではないが、先述した小学生の事例のように、実物

資料、本物を直接観察できる機会を設けていければと思う。

現地での見学、遺物出土状況など、等身大に歴史と接す

ることのできる場を増やしていきたい。また、この年齢層

が高い関心を示す一つとして、都市景観がある。最近では、

開発されたベイエリアよりも、むしろ神戸の旧居留地をは

じめ、大阪天満の木造町家をリニューアルしたカフェに新鮮さを感じる若者が多いという。これなども歴史的建造物に新しい価値を附加していく事例である。こうなつたら、文化財の活用について、極端にいえば何でもありという感じになるかもしれない。それくらいの雰囲気を作り上げることができるれば、しめたものだと思う。そのときに、行政の考えを押し付けるのではなく、支援する形で関与すべきである。こういうことを考えながら、今しばらくは生涯学

習の業務に携わっていきたい。

現在の生涯学習の仕事を通しても、おもしろいことに気がついた。土地柄もあるのであろうか、やはり考古学や古代史に関する内容の講座は人気が高い。しかも、年輩のつまり仕事を定年退職された方がほぼ大半を占める。このような傾向は、どこの市民講座などにも見られるようである。これにはさまざまな理由があるが、私が気になったのは次のようなことである。こういった方々は、自分の居住している地域には多少の関心を持ちながらも、実はあまり知らない。中には市民ホールなどの公共施設などの場所もわからない、といった具合もある。それはなぜか。現役の

ときも地元の風景を目にする機会といえば、仕事場所と自宅との間の行き帰りのみというのが案外多かつたのである。

こういう人たちには、「自分の住んでいる周辺に何があるのか」という好奇心から、この地域に特徴的なもの、固有のもの、有名なもの、さらに本物が実存すれば、より一層の関心を示す。この特徴的・固有なものが、実は古墳や遺跡といった文化財なのである。一過性のトピックスミ的なものばかりではなく、歴史的意義を踏まえた解説や適切な誘導があれば、予想以上に興味を持つてもらえることを確信した。ただ、これなども、受講料を支払って参加するという、それなりに意識の高い一部の人々に限つてのことかも知れない。しかし、こういった潜在的サポーターがまだまだたくさん



サイデンス・テッカー氏との座談会

伊井春樹

『源氏物語』翻訳者としての日本文学観

エドワード・G・サイデンス・テッカー氏は、『源氏物語』の翻訳とともに、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫の作品など近代文学の翻訳も多数手がけ、とりわけ川端作 品はそれによってノーベル文学賞を受賞したことは広く知 られているであろう。ストックホルムでの川端の受賞記念講 演「美しい日本の私」は、直前まで原稿ができなく、現地 でも手直しをしたようで、古典をふんだんに引用した、川 端独特のあいまいな表現をしているだけに、その英訳には 困難をきわめたらしい。なお、講演文とその翻訳は、講談 社現代新書（一九六九年）に収められている。

サイデンス・テッカー氏と知り合ったのは、もう二十数年 以前、私がまだ東京に住んでいたころであった。『源氏物語』の千百ページからなる二冊本の翻訳が出版されたのは 一九七五年なので、その数年後につき合うようになつたら しい。イギリスのアーサ・ウェイリー訳が出たのは一九三三 年、それから四十数年ぶりの快挙であった。ウェイリー訳 によつて世に『源氏物語』の存在が明らかになり、翻訳のす ばらしさもあつて絶賛され、世界文学として認知されるこ となる。ただ、ウェイリー訳は鈴虫巻を削除したり、部 分的に省略するなど、全訳というわけではなかつた。でき だけ原作に忠実に、全巻を翻訳したのがサイデンス・テッ カー氏であり、現在でもアメリカではソフトカバー本が書店 に並べられているように、世界における『源氏物語』の普及 には大きな功績があつた。

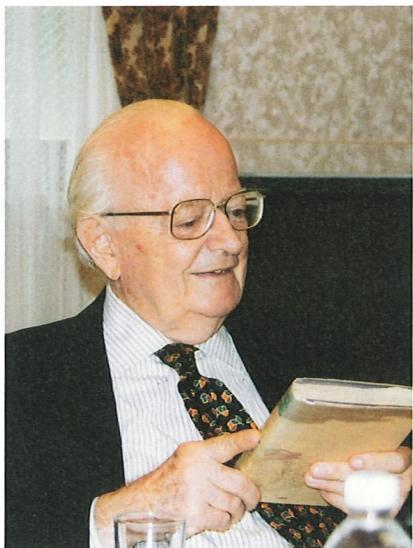
「インターフェイスの人文学」では、私は日本文学の翻訳 論を一つのテーマとし、国際集会などを開催するなどして きたが、日本文学の翻訳と研究の先駆者であるサイデン ス・テッカー氏から直接話を聞くことを計画した。戦後から

今まで感じたこと、とりわけ『源氏物語』の翻訳事情や、 作品論をうかがつて記録しておこうと思つたのである。 数年前の朝日新聞のサイデンス・テッカー氏へのインタビュー 記事に、自叙伝を執筆していることが写真入りで掲載され たことがあり、その出版を心待ちしていた。昨年「Central 「Tokyo」として完成し、日記を用いながら、祖父の代からコ ロラドでの生活、海軍日本語学校時代、戦後はアメリカ國 務省外交官として日本勤務、その後退職して東京大学大 学院に外国人として初の入学、スタンフォード大学、ミシ ガン大学、コロンビア大学の教授、ドナルド・キーンさんと 半年ごと日本に滞在し、翻訳と研究を続けてきたことなど、 後半は数多く近代文学者との交流などが中心に興味深い 内容が書かれている。その感想を電話で話していくうちに、 ゆっくりと話をしようということになり、今回の座談会となつた次第である。

サイデンス・テッカー氏は一九二一年二月生まれ、八十二 歳になられたのだが、記憶も確かに、足をすこし悪くさ れているとはいえ、いたつて矍鑠としている。九月十一 日と十二日、大阪大学学士会館連絡事務所で、私のほか に、国文学研究資料館の加藤昌嘉助教授、藤井由起子C O E研究員、それに録音や写真などをしてもらうために 海野圭介助手とが出向いた。お疲れになるのを気にしながら、二日間の座談会、さまざまな話をうかがうことができた。一九四五五年九月の戦後間もなく、海兵隊員として硫 黄島から佐世保に上陸、それが日本内地への最初の出会いとなる。除隊後帰国し、国際関係論で修士号を取得、その後日本を再度訪れることになつたのである。国務省のあつた新橋の第一ホテルの部屋に、日本の研究者がタバコほしさ

に訪れて古典文学を教えてくれたこと、その折に読んだのが『蜻蛉日記』であり、これは後に初の古典文学の翻訳となつたのである。東京大学では、池田亀鑑、久松潜一、吉田精一氏などの思い出、フォード財団との関係で日本の近代文学を研究するようになつたことなど、サイデンステッカー氏の著作や以前に直接話を聞いたこともあるたが、知らなかつたことも多く、興味深い内容だつた。

氏が毎日日記をつけていることは知つていたが、その七十冊は現在コロラド大学に寄託されていること、また海兵隊員としてハワイに滞在中にウェイリー訳の『源氏物語』を読んで感動したことなど、貴重な話を聞くことができた。とりわけ、「翻訳者がほめられるような翻訳ではだめだ」とのことばは、翻訳とは何かということを強く考えさせられた。翻訳者が表面に出るのではなく、あくまでも作品をいかに英語として表現し、作者を生かすかというのが、翻訳のもつとも大切な務めであるというのである。それとともに、平安末期の作品などは、原典に縛られるのではなく、自分なりに自由に翻訳をしていみたとの夢も語つていた。



E.G. サイデンステッカー氏



サイデンステッカー氏と著者

伊井春樹（いい・はるき）

1941年、愛媛県生まれ。1968年広島大学大学院文学研究科退学。1992年文学博士。国文学研究資料館助教授等を経て、大阪大学大学院文学研究科教授へ。2004年3月同退職。著書に『源氏物語注釈史の研究』（桜楓社）『源氏物語の誌』（三省堂）『成尋の入宋とその生涯』（吉川弘文館）『源氏物語注釈書・享譽史事典』（東京堂出版）『物語の展開と和歌資料』（風間書房）ほか。専門は平安・中世文学研究。特に、海外の日本古典文学研究者との交流に力を入れてきた。

葉を求めて —「右の耳に水」—

横田睦子

「葉(しおり)」の研究を始めてから十年が経とうとしている。

葉の原義——もともとは枝折(しおり)と記し、旅人が山道などで木の枝を手折り、後進が迷わぬよう道しるべとしたもの——を知ったときの感動、これまで分析を加えてきた「葉」の一葉一葉を手にしたときの喜びは今もこの手のうちに温かい。資料収集の作業そのものや、その過程での旅や出会いなどをいつもどこかで楽しんでおり、これが世に出て他の皆様のお目に触ることになろうとは想像すらしたことがなかった。大阪大学大学院言語文化研究科という「場」で少しづつ書き綴った論文の寄せ集めが、『渡米移民の教育』で読む日本人移民社会のタイトルで出版されたのである。

拙著で分析を加えた「葉」とは、百年ほど前にアメリカを目指して海を渡った方々の間に流布した一枚刷りのリーフレットなどである。未知の世界への移動を経験し、異文化の壁を体感した人々は、想い想いの情報を「葉」というメディアを通して後進のものに示した。分厚い書物に触れる習慣のないものでも「葉」であれば柳行李や風呂敷包みに忍ばせられる。ときには長い船上でのお供役も果たしたはずだ。いわば、「葉」は最も小さな「紙上の学校」だったのだ。

例えば、和菓子の箱に入っていたような葉、『渡米婦人心得』から「船上の心得」の一節。

(下着・寝巻きのような格好のときは必ず上着を着てね)
 細帯の時は必ず被布を被ること
 特別親切してくれる男子に警戒し身に隙を見せぬこと

どうですか? 最近の一人旅の女性の皆さんも気をつけて。

百年のときを経ても、言葉は多少変わっても、移動する人間への眼差しはそう変わらない、そして、どこかあたたかい。

「葉」はそれを証言するかのように今を生きる私に語り掛けてくる。

さて、この研究を始めてから十年と書いたが、実はもつと以前からその動機となるような経験があつたのではないとかとあれこれ思い返している。身近な人間、そして私自身が移動を重ねるうちに得たものあるいは失つたものについてである。

すでに他界した私の父は、十代の初め、初めて生まれ育つた五島列島の福江島を出て大阪の親戚を訪ねる際、とどう他の誰とも一言も言葉を交わさず、大阪駅に到着するまで立つたままで車中を過ごしたそうである。福江島から長崎市まで船で五時間以上、長崎駅から大阪駅まで列車である一日かつた時代である。同じ九州とはいえ長崎市は父にとって大きな町であり、目的地の大阪はさらに大規模な都会だったのである。今では想像もつかないほど の文化差が父の前に立ちはだかっていたのだ。大阪で観た歐米の映画の話、大阪で食べたきつねうどんの話、大阪は當時の西日本の少年少女にとってそうであつたように父にとつてもまさに憧れの地であったのだろう、後年大阪での思い出話をするときの父の目には少年の輝きがあつた。しかしこまつた席の父の言葉のどこかにいつも大阪訛りがあつたのは、その後数年を大阪で過ごすことになつた以上に父の文化のスタンダードが大阪との出会いによって生成されたからに違いない。



横田睦子 (よこた・むつき)

「インターフェイスの人文学」特任教員 (COE)

2002 年 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程修了

2000 年 第 25 回国際理解教育賞 (エースジャパン賞)

著書『渡米移民の教育—葉で読む日本人移民社会』※写真右

(2003 年、大阪大学出版社)

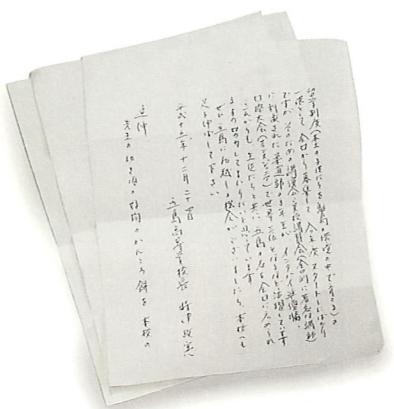
専門は言語文化学・社会教育 (移民教育、薬物教育など)

伊万里生まれの祖母は、福岡の嫁ぎ先が海運業だったことから、ある時期から福江島の港近くに暮らすことになり、祖父が船の事故で他界した後も五島の文化のうちに五島弁で生活していた。長崎の町の真ん中の子供だった私は学校が休みになると、まるで船の積荷か何かのように大波止（長崎市、出島の隣です）の船着場で福江島に向かう誰かに簡単に預けられては、この祖母を訪ねた。勝手知ったる二等船室に走り、積み上げられた中から自身の毛布と洗面器（船酔いに備えて）を確保し、その日の朝に市内のベーカリーで焼かれたパン（当時はお土産として喜ばれた）、宿題と着替えを荷置棚に放り込む。それさえすれば、知らない大人や子供と「今日は風でよかつた」などと話したり、甲板に出ては航行に沿つて跳ね急ぐ飛魚の群れを眺めたりしながら福江港までの四時間半を過ごすのだ。船を降りた後の、陸の上でもしばらく体が揺れているような感覚が懐かしい。桟橋周辺で売っていた海産物の匂いは今でも鼻先によみがえる。好物のかんころ餅（さつま芋ともち米でできた五島の名産品）を求めて祖母と一緒に歩いた海沿いの道には湿った潮風が吹いていた。そして小学生だった私を親戚が待つ大阪に連れ出し、梅田の百貨店や京都の歌舞伎へと誘ってくれたのもこの祖母だった。大阪での祖母は、いつもと変わらない地味な色の和服に包まれてはいたものの、五島では隠し持つていたような表情を、白い半襟の上にたたえていた。長崎の生家には、この祖母を介して、都会の学校の受験や商用のため、五島から、そして五島へと移動する客が絶えることがなかつた。「むつちゃん、『みんなにみん』で何かわかるね、私は実に多くを移動する人々の言葉や指先から教わったものだ。

……などといふことをちょっとと「あとがき」に書いたので、父がほんの一時期お世話を長崎県立五島高校に一冊送らせていただいたところ、クリスマスイヴの日に思いがけないことが起つた。お目にかかつたこともない

五島高校の校長先生から連絡があり、職員の方お手作りの「かんころ餅」を送つて下さるとのことだった。受け取つた「かんころ餅」には便箋三枚のお便りと何という植物だろう、七つ葉の緑が添えてあつた。それは昔私が初めてアメリカに旅立つとき、もう一人の祖母が赤と白の水引を結んで道中のお守りにと持たせてくれたものだった。

私は、今でも大阪大学という鬱蒼とした森の中で、私のために手折られた「葉」一道しるべを探す旅を続いている。



「記憶の文化」を考える —オーストリアにおける「集合的記憶」を事例に—

水野博子

現代社会の構造が複雑かつ急速に変化する今日、人文学においても、従来の学問領域・空間を超越し、広い視野からさまざまな問題を複合的に考察することが要請されている。そうした状況において人文学やその関連領域に携わる人々がひときわ関心を寄せるテーマの一つに、「記憶」の問題がある。中でも人間社会が織り成す歴史・文化とのかかわりにおいて、「記憶」研究は重要な意味を持つようになってしまった。こうした関心領域を筆者は「記憶の文化」(Erinnerungskultur)とよんでいる。

「記憶の文化」研究では、長い間「過去」を「占有」してきた既存の政治史中心の「歴史学」の領域を超えて人類学や文化史や社会学などと結合し、さまざまなテーマ設定が可能となっている。実際、たとえばどのようなものがあるのかと少し思いをめぐらせただけでも、個人、集団、国家、帝国、民族、ジェンダー、マイノリティ、植民地、暴力、戦争、身体、表象、伝統、言語、教育、シンボル、アイデンティティなど、今日さまざまな考察が行われている。これだけテーマが多岐に渡ると、そこに普遍的なディシプリンを総合的に体系付けて確立することは難しいが、少なくとも「集合的記憶」がひとつ重要なキーワードであると思う。

「集合的記憶」とは、個人の記憶(伝達的記憶)も文化的記憶も社会的なコンテキストに制約され、そこに再構成されるという理論に基づいている。換言すれば、社会が形成されている限り、そこに帰属する社会構成員によつて形成され、共有されるものであり、要するに社会集団を支える「アイデンティティ」の重要な構成要素となるといつてよいだろう。二〇世紀の歴史を考える際に最も最優先して安定化されるべき社会のシェーマが国民国家であつたとする

ならば、それを支えたもつとも重要な「集合的記憶」は「国民的記憶」ということになる。その際、「国民的記憶」がどのように形成されたのか、またその枠に包含されたものと、逆に排除されたものは何かを明らかにすることが、今

目的課題をなしている。

たとえば筆者は、日本では一般に音楽の国として人気の高い中欧の小国オーストリアの現代史を研究している。オーストリアは、一九三八年三月にナチス・ドイツに「併合」された経験を持つため、第二次世界大戦後はナチス・ドイツによって侵略された「最初の犠牲国」という自己認識を形成し、一九八〇年代後半までそれを維持・強化してきた。こうした認識は多くのオーストリア国民にも共有され、国内の安定には欠かせない重要な「集合的記憶」となつていつた。しかし現実には、非常に多くの人々がナチス・ドイツの「一部」となることを歓迎したのであって、一方的な「犠牲者」意識は歴史的事実とは食い違つている。にもかかわらず「犠牲者」という理解が戦後のさまざまなコンテキストにあつて「オーストリア国民」の「集合的記憶」の中核を占めたため、故郷を追われたオーストリア系ユダヤ人や政治的被迫害者たちの記憶は排除されなければならず、ゆえに「オーストリア国民」という「集合的記憶」にもそれらは含まれないこととなつた(写真①)。一九八〇年代後半以降さまざまな契機によつて「犠牲者」という「集合的記憶」が批判されるようになると、オーストリア・アイデンティティが危機といわれる状況に陥つたのも当然であった。

こうした「集合的記憶」がどのように形成されたのかを探る具体的な題材として、しばしば記念碑や戦没者の追悼行為、国歌、国旗、国民的英雄などが取り上げられる。

これらすべては、（ナショナル）アイデンティティを構成する重要な要素（またはそのための「装置」）であり、記憶研究の中でも「記憶の場（所）」や、「記念」あるいは「コメモレーション」の研究として展開されるものである。

たとえば、オーストリアには今でもほとんどの村や町に英雄（戦没者）記念碑が町の中心部にみられるが、それらの多くは、第一次世界大戦の戦没者を追悼するために建立された碑に、第二次世界大戦中の戦没者の追悼の役割を付加した形をとっている（写真②）。例としてザルツブルクの市営墓地の一角にある英雄記念碑を見ると、そこには「祖国のために死んだすべての者たちを追悼して、一九一四〇一九一八及び一九三九～一九四五」と刻まれている。この碑が現代のオーストリアの地にある以上、ここにある「祖国」とは「戦没者」にとつても現代のオーストリアであつたかのような印象を受ける。しかし実際には、二つの年号が示すとおり、前者は旧ハプスブルク帝国下で行われた第一次世界大戦であつたし、他方、後者は第二次世界大戦、すなわちそれは「ドイツ第三帝国」を守るために戦争であつた。ということは、オーストリアが長い間自国のアイデンティティの拠り所としてきた「犠牲者」という「集合的記憶」とはすぐには相容れないものであるが、にもかかわらず、特に一九五〇年代以降、戦没者の死がオーストリアのためであつたものとして顕彰されることになったのである。

残念ながら、上記のような状況にいたる特殊オーストリア的な背景をここで論じることはできないが、記憶研究に携わる以上、多かれ少なかれこうした「矛盾」に出くわすため、それを理解するべく研究者はしばしば頭を悩ませることになる。重要なのはしかし、そうした矛盾を解消することでなく、なぜ矛盾する過去の表象がひとつ社会集団において成立可能か、そしてそれはどのようなコンテキストにおいてであり、そうした記憶の主体は誰か、を問うことにあると思うのである。それは換言すれば、あるひとつの

記憶を共有できないものはその集団から「排除」され、その集団にとつて「他者」を形成するということをどのよう考へるべきか私たち一人ひとりが問うことでもあるだろう。

総じて記憶研究は、「歴史に眞実も事実もなく複数の物語があるだけである」というようななげやりな結論に行き着くことなしに、複数の「集合的記憶」を認めることができ、結局は自己が帰属する集団が自明のものとして伝達していく記憶―そしてそれは多分に無自覚的に「文化」として染み付いている場合がある―を疑つてみると表裏一体の関係にあることを自覚させてくれるよう思うのである。そこそこ記憶研究の魅力があると同時に、広く社会を寫し出す人文学においても一考に値する問題群が提出されてゐるゆえんではないだろうか。



上／オーストリア・アイゼンシュタット市のユダヤ人墓地（写真①）

下／同市、戦没者記念碑の一角（写真②）

水野博子（みずの・ひろこ）

1970年3月生まれ。2000年グラーツ大学にて博士号（Ph.D.-歴史学）を取得。大阪大学言語文化部講師を経て、2004年同助教授に就任見込み。主な業績として、「Die Länderkonferenzen von 1945 und die NS-Frage», in: Zeitgeschichte (Wien 2001) Jg. 28, H. 5.、『戦後初期オーストリアにおける「アムネスティー（恩赦・忘却）政策』の展開』『東欧史研究』（第24号、2002年3月）など。



《編集後記》

ニュースレター第3号も、執筆者の皆様に力のこもった原稿をいただき、読み応えのある一冊になったと思います／マンガ対談をマンガ仕立てにしてしまったメディア・スタッフ、西田さんの力業には、対談者二人してア然、そしてマイッタ！／COEプログラムの中間評価を控え、活動記録としての側面にも力を入れました／研究スタッフの息もぴったりそろい、「インターフェイスの人文学」はいよいよ3年目、第二の船出へ。（金水）

大阪大学21世紀COEプログラム
「インターフェイスの人文學」ニュースレター
Interface Humanities 03

発行=「インターフェイスの人文學」研究開発委員会
編集長=三谷研爾
編集=金水敏 永田靖 山中浩司
ロゴデザイン=奥村昭夫
編集協力・デザイン=彩都メディアラボ株式会社
レイアウト=西田優子 清水良介
印刷=株式会社写真化学

発行日 = 2004年3月10日

連絡先 = 〒560-8532 豊中市侍兼山町1-5
大阪大学大学院文学研究科内
「インターフェイスの人文學」事務局
Phone: 06-6850-6716
Fax : 06-6850-6718
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/>
coe_office@let.osaka-u.ac.jp

Osaka University
The 21st Century COE Program Newsletter
Interface Humanities 03

Published by COE Committee Interface Humanities
Chief editor: Kenji MITANI
Editors: Satoshi KINSUI, Yasushi NAGATA, Hiroshi YAMANAKA
Logo Designer: Akio OKUMURA
Editorial advisor: Saito Media Lab Co., Ltd.
Layout: Yuko NISHIDA, Ryosuke SHIMIZU
Printed by Shashin Kagaku Co., Ltd.

Published on March 10, 2004

Contact address: Interface Humanities Office
School of Letters, Osaka University
1-5 Machikaneyama-cho, Toyonaka, Osaka 560-8532
Phone: +81-6-6850-6716
Fax: +81-6-6850-6718
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/>
coe_office@let.osaka-u.ac.jp

